The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『観音冥応集』出典考 : 巻第三8話を例として
Author(s)	山崎, 淳
Citation	詞林. 2007, 41, p. 66-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『観音冥応集』出典考

―巻第三8話を例として―

山崎　淳

一　はじめに

庶民教化に尽力した近世の真言僧・蓮体（一六六三～一七二六）が編纂した『観音冥応集』（以下、『冥応集』）は、全六巻十二冊・一九二話に及ぶ観音霊験説話集である。[1] 本書の研究はまだ緒に就いたばかりであり、説話の出典などもほとんど明らかにされていない。本稿は、そうした中から一話を取り上げ、出典及びその利用の様相について明らかにするものである。

二　説話の出典

取り上げる説話は、『冥応集』巻第三8話「和光ノ方便ニ依テ愛執ヲ離ル、事」である。あらすじは、以下の如くである。

上総国・高滝（たかたき）の地頭が、娘を連れて熊野詣でをする。熊野の若い僧が、この娘に恋をしてしまう。僧は、娘に対する執着心を払うよう本尊・権現に祈るが、娘の面影が忘れられない。ついに僧は、娘を追いかけて上総へと旅立つ。鎌倉を過ぎ、「ムツラ」という所で便船を待っていたが、疲れてまどろむうちに次のような夢を見る。僧は高滝へ行き、そこで地頭に再会する。出発しようとする僧を地頭は引き留める。もとよりそのつもりであった僧は、高滝に留まる。そして、娘に恋文を送り続け、娘もそれに応える。息子が一人生まれるが、そのことを聞いた地頭夫妻は怒り、娘は勘当されてしまう。しかし、後には許され、僧も地頭の養子となる。僧は鎌倉へ代官として赴き、勤めを果たすようになる。息子が十三歳になった時、元服のために親子で鎌倉へ行くことになる。船で海を渡っている際、波風が激しくなり、息子は船から落ちてしまう。そこで慌て騒いでいるうちに、目が覚める。望みが叶って栄えても、それは一瞬の夢であり、喜びがあったとしても、悲しみもまたあるのだ、と僧は悟る。その後、僧は熊野に引き返し、激しい修行に打ち込む。

この説話は、すでに『沙石集』に収録されている（巻第一9話）。『冥応集』の説話題目は、『沙石集』の「和光ノ方便

ニヨリテ妄念ヲ止事」（梵舜本）[2]に近似し、説話の本文も『沙石集』に大きく重なる。また、『冥応集』巻第一1話「観自在菩薩本説ノ事」における「援引書目」の中には、『沙石集』の名がある。以上の点から見て、右の説話の出典は『沙石集』と認定してよいだろう。

前述の「援引書目」に名が挙がっている以上、『冥応集』の出典として『沙石集』を指摘すること自体に、さほど意味はないかもしれない。しかしながら、『沙石集』は、近世に盛んに出版され、広く受容されていた作品でもある。[3]『冥応集』は、近世における『沙石集』享受の一例として位置付けられるべきであるし、中世の説話が近世にどのように変容していったのかを見ていく上でも、格好のサンプルになると考えられるのである。

したがって、出典であることを指摘するだけでなく、どのような系統の『沙石集』が利用されたのか、どのような形で『沙石集』の説話は取り込まれたのか、その結果を含めて、『冥応集』における説話にはどのような意味が付与されることになったのか、などが検証されていかねばならない。そのような事例を一つ一つ積み重ねていくことで、『冥応集』という作品全体の特質とともに、『沙石集』受容の具体相も明らかになっていくことだろう。

三　蓮体が利用した『沙石集』

まず、『冥応集』編纂に際し、蓮体が利用した『沙石集』について検討してみたい。周知のように、『沙石集』は伝本が多く、内容・本文の異同も複雑である。なお、確認し得た伝本は以下の通り。広本系（十二帖本）が俊海本・米沢本・元応本・藤井本。広本系（十帖本）が梵舜本・内閣文庫本・阿岸本。略本系が長享本・神宮文庫本・岩瀬文庫本・中央大学本・慶長十年（一六〇五）刊古活字十二行本・同年刊古活字十行本・元和二年（一六一六）刊古活字本・正保四年（一六四七）刊整版本・天和三年（一六八三）刊整版本・貞享三年（一六八六）刊整版本。[4]

『冥応集』の成立した時代からすれば、近世に出版されたものを用いている可能性が、まず考えられる。例えば、『平治物語』巻下「頼朝生捕らるる事付けたり常葉落ちらるる事」を出典とする『冥応集』巻第三16話「義朝ノ妻常盤観音ヲ念シテ母子共ニ安穏ナル事」の本文は、半井本や金刀比羅本よりも、圧倒的に古活字本や整版本に近い。この事実は、蓮体が用いた資料について一つの道筋を示しているが、やはり、実例に即して確認していくべきであろう。

ここでは、前掲『冥応集』巻第三8話「和光ノ方便ニ依テ愛執ヲ離ル、事」とともに、巻第三26話「観音ノ垂迹ヲ軽ンジテ罰ヲ蒙ル事」も取り上げる。巻第三26話は、本文中に

「沙石集」と記されており、『沙石集』利用が明らかな一話である。その出典は、『沙石集』巻第一10話「浄土門ノ人神明ヲ軽テ蒙罰事」（梵舜本）[5]である。この二話から、蓮体が利用した『沙石集』について示唆を与えてくれる例を、それぞれ一つ挙げてみる。

『冥応集』巻第三8話の例は、僧が夢の中で高滝の地頭と再会した際、地頭が発した「何（イカ）ニシテ下リ玉ヒタルゾ」という言葉である。この『冥応集』の本文に一致するのは、略本系の岩瀬文庫本や刊本類である。

『冥応集』巻第三26話の例は、死を目前にした武士に、師匠が念仏を勧める場面の一節で、「年来ノ師匠（シシヤウ）学生（ガクシヤウ）、善知識（ゼンヂシキ）ニテ」というものである。これに完全に重なるのは（振り仮名は除く）、慶長古活字十二行本・元和古活字本・正保四年刊本・天和三年刊本・貞享三年刊本である。いずれも略本系で、かつ刊本である。

取り上げた『冥応集』の二話については、『沙石集』と完全には一致しない。蓮体は、『沙石集』を利用しているのであり、その忠実な写しを作成しているのではないのだから、当然のことではあろう。それでも、二話全体を比較してみると、『冥応集』の本文は、略本系『沙石集』に近いことが判明する。

『沙石集』諸本をすべて確認したわけではないので、『冥応集』編纂に際し蓮体が使用した本を、一つに特定することは現時点ではできない。しかしながら、右に挙げた例から見て、やはり、当時出版されていた『沙石集』を利用した可能性が高い。[6]

四　『冥応集』説話の特質

『沙石集』巻第一9話では、件の僧の説話（以下、仮に「高滝説話」と呼ぶ）の後に、それとほぼ同量の、夢に関する記述が続く。この部分は、いわゆる説話評論ということになる。『沙石集』巻第一9話は、前半の高滝説話と、後半の説話評論から成るのである。

説話評論は、さらにいくつかの部分から構成されている。試みに略本系により列記すると、以下のようである（以下、『沙石集』の引用は正保四年刊本に拠る。振り仮名は省略。句読点は私）。

①「昔荘周ガ片時ノ眠ノ中ニ胡蝶ト成テ…」、②「凡ソ三界ノ輪廻四生ノ転変、皆是無明ノ眠ノ中ノ妄想ノユメナリ。サレハ円覚経ニハ…」、③「古人云…」、④「梁ノ武帝ノ時ムサウ有ケリ…[7]」、⑤「法相ニハ常ノユメト思ヘルハ…」、⑥「楽天云…」、⑦「又イハク…」、⑧「荘子ニ云…」、⑨「梵網云…」、⑩「唯識論云…」、⑪「慈恩大師ハ…[8]」。

『荘子』を出典とする有名な故事から始まり、以降、畳みかけるように、夢に関する経典などの文言・説話が綴られていく。この説話評論は、『沙石集』諸本で若干の出入りは

あっても[9]、必ず記されている。この部分があることにより、『沙石集』の高滝説話は、現実と夢との関係を示す具体的な例証としての側面が強調されることになると考えられる。

類話にも、その傾向が見られる。高滝説話の類話としては、『類聚既験抄』、『金玉要集』第十、『直談因縁集』五巻（安楽行品）のものが知られている[10]。このうち、『類聚既験抄』の類話は、極度な簡約化、あるいは、おそらく欠損などによって元の形がよくわからない[11]。そのため、考察の対象とするのは、後の二作品における類話である。

『金玉要集』の高滝説話は、『沙石集』巻第一9話を出典としている[12]。『金玉要集』では、高滝説話に続いて夢に関する説話評論（④⑤は除く。注9参照）が記されており、構成の点でも『沙石集』を踏襲していることがわかる。したがって、『金玉要集』においても、夢についての例証という高滝説話の性格は、保たれているといってよい。

『直談因縁集』は、法華経直談の因縁（説話）の集成である。その依拠資料として、可能性が高いと考えられているものに『沙石集』がある。高滝説話も、『沙石集』に由来する一話に数えられている[13]。ただし、『直談因縁集』の高滝説話の場合、件の説話評論が付いていない。

ここで注目したいのは、『直談因縁集』の高滝説話が、「夢ニ付テ」という文言で始まることである。すなわち、「夢」を説明する説話として用いられているのである[14]。説話評論こそ記されていないものの、夢についての例証であるという、『沙石集』における高滝説話のあり方が、ここには反映されていると見ることができるだろう。

これらの類話と比較した時、『冥応集』の高滝説話は、特異なものとして際立ってくる。まず、『冥応集』では、『沙石集』における説話評論が切り捨てられている。それだけでなく、『直談因縁集』とは異なり、説話が夢を説明するためにも使われていない。もちろん、説話の内容自体が、夢を媒介にして悟るというものである以上、夢の要素が一掃されているわけではない。しかしながら、類話と比べると、『冥応集』の高滝説話と夢との関係は希薄になっている。

では、そのことによって、何がクローズアップされるのだろうか。一言で言えば、それは観音霊験譚への傾斜である。

『冥応集』では、高滝説話の後に、

実ニ三所ハ本地弥陀薬師観音ナレバ、彼ヲ度セントテ此夢ヲ見セ玉フナルベシ。（傍線稿者。以下同じ）

という、熊野三所について触れた一文が記されている。これは、『沙石集』の高滝説話の末尾にある「和光ノ御方便ニテコソ有ケメ」を、より具体的にしたものである。

さらに、『冥応集』では、前掲「実ニ三所ハ…」の一文に続けて、

婬欲多カラン者、常ニ念シテ観世音菩薩ヲ恭敬スレバ、即チ欲ヲ離ル、コトヲ得ト説玉ヘルハ、実ナルカナ。

が加えられている。この一文で説話は締め括られることになる。最終的には、熊野三所の本地仏から観音へと焦点が絞られているわけである。このような観音利生の強調は、『沙石集』を含めた類話には見られないものである。

右の一文に記される「婬欲…欲ヲ離ル、コトヲ得」は、『法華経』巻第八・観世音菩薩普門品第二十五の「若有衆生。多於婬欲。常念恭敬。観世音菩薩。便得離欲」（岩波文庫に拠る）を引用したものである。普門品の引用ということからわかるように、この一文が加わることで、『冥応集』の高滝説話は、観音霊験譚の装いを確実にまとうことになる。高滝説話が本来持っていた夢との密接な関係[15]からは乖離してしまったかもしれないが、『冥応集』における一話としては、相応しいものになったといえる。

西国三十三所巡礼の第一番目が熊野那智の如意輪観音であることなど、熊野と観音には強い結び付きがある。蓮体は、始まりと終わりが熊野であることから、『沙石集』の高滝説話に観音霊験譚としての利用価値を認めたのであろう。そして、観音霊験譚によりふさわしいものとすべく、操作を加えていったと考えられる。

一つの説話が、収録される作品に応じて主張を変化させるのは、珍しいことではない。『冥応集』の中の一話なのだから、観音関係の説話に読み替えられているのも当然のことではある。しかしながら、『沙石集』以来（あるいは高滝説話の生成以来）のあり方からすれば、『冥応集』の高滝説話における意味付けの変化は、大きな転換であったと認めてよいのではないだろうか。

五　美文調の出典

『冥応集』の高滝説話には、さらに大きな特徴がある。それは、美文調の表現を用いていることである。

このような部分は、『沙石集』はもちろん、『金玉要集』や『直談因縁集』にもない。『冥応集』で新たに付加されたものと見て差し支えないだろう。こうした表現にも出典が見出せるのか、以下に検討していきたい。

まず、僧が娘に恋い焦がれ、上総へ行こうと決心する所を、『冥応集』では、

何事ヲモ覚ヘザリケレバ、①若シルベスル海人ダニアラバ、忘レ草ノ逢ト云浦ノアタリニモ、尋行ナマシト、負打掛テアクガレ出デ、上総ノ国ヘゾ下リケル。

と表現している。出典の『沙石集』では、傍線部は「忍カタクシテ、心ノヤルカタト」であり、大きく異なっている。

この美文調は、実は『太平記』を用いたものである。傍線部①については、以下に挙げる『太平記』巻第二十「義貞首懸二獄門一事付勾当内侍事」に、同じ表現が見える[16]。勾当内侍に恋い焦がれる新田義貞の心情を表すために、①は使われている。

〔新田義貞は〕朝ヨリ夙ニ帰リテモ、風カナリシ面影ノ、ナヲコ、モトニアル心迷ニ、世ノ態人ノ云カハス事モ心ノ外ナレバ、イツトナクヲキモセズ寐モセデ夜ヲ明シ日ヲ暮シテ、①若シルベスル海人ダニアラバ、忘レ草ノヲフト云浦ノアタリニモ、尋ネユキナマシト、ソゞロニ思シヅミ給フ。

次の『冥応集』の例は、僧が上総で娘の父親である地頭に引き留められ、目論見通りに娘に近付こうとする箇所である。

本ヨリソノ心ザシナレバ、留リテ左右シテ文ニテ心ノ中ヲ通ジタリケレバ、娘世ニ愧シゲニテ貌打赤メタル気色ノ、②折ハ落ヌベキ萩露、拾ハゞ消ナン玉篠ノ雹ヨリモ猶アダナレバ、弥心迷ヒテ命活ベクモ思ハザリケル程ニ、度々文ヲヤリシニ返事ヲダニセズ、③吹モ定メヌ浦風ニ靡キハツベキ煙ノ末モ、終ニハ浮名ニ立ヌベシト、深ク思ヒ入タル体ナリ。日数重ナリテ、④玉章モ千束ニ積リケレバ、娘モ上レバ下ル稲舟ノ、否ニハアラズト思ヘル気色ニナン顕レタリ。サレドモ互ニ人目ヲ中ノ関守ニテ過シケル程ニ、終ニハ節ヲ得テ忍々ニ通ヒケリ。互ノ心ザシモ浅カラザリケル故ヤガテ男子一人イデキヌ。（四角囲み・波線稿者。以下同じ）

これは、『冥応集』の高滝説話における最大の独自部分である。当該部分の内容は、「僧は娘に何度も手紙を送るが、娘は浮き名の立つことを恐れて返事もしなかった。なおも送られてくる手紙が積もり積もったので、とうとう娘は心を開く。それでもお互いに人目を忍んでいた。しかし、ついには結ばれる」というものである。あたかも恋物語の一場面を見せられているようであり、しかもこれが美文に乗って展開していくのである。

『沙石集』で、右の部分に相当するのは、

本ヨリソノ心指ナレバトゞマリテ、トカクウカゞヒヨリテ、忍々カヨヒケリ。互ノ心ザシアサカラズ。サル程ニ男子一人イテキヌ。

である。『冥応集』に比べ、極めて淡泊な表現であることが一目瞭然である。

『冥応集』の②は、娘が恥ずかしそうに顔を赤らめている様子に、僧がいよいよ思いを募らせていく部分に使われている。これと同じ表現も、『太平記』巻第二十「義貞首懸二獄門一事付勾当内侍事」に見える。勾当内侍を恋い慕う新田義貞は、彼女の様子を見て、宮中から退出することもままならぬ状態に陥っている。

〔勾当内侍の〕シホレ伏タル気色ノ、②折ラバヲチヌベキ萩ノ露、拾ハゞ消ナン玉篠ノ、アラレヨリ尚アダナレバ、中将（＝新田義貞）行末モ知ヌ道ニマヨヒヌル心地シテ、帰ル方モサダカナラズ、淑景舎ノ傍ニヤスラヒ兼テ立明ス。

女性の「気色」を形容するものとして②が記されていくと

いう形まで、『太平記』と『冥応集』とは重なっている。また、波線部の、男が心を乱しているという点も共通している。さらに付け加えると、『太平記』では、①と②が同じ場面に記されている（②を含む部分の直後に①を含む部分が来る）。以上の点からも、『冥応集』の当該部分に、『太平記』が用いられているのは、ほぼ確実といってよいだろう。

僧に対して返事を出さず、浮き名が立つことを恐れる娘の心を形容した③は、どうであろうか。同じ表現は、『太平記』巻第十五「賀茂神主改補事」に見える。以下は、二人の皇子（＝後の後醍醐・後伏見）が、賀茂の神主・基久の娘を見初め、手紙を送る場面である。

イヒシラヌ御文ノ数、千束ニ余ル程ニ成ニケリ。女モ最物ワビシウ哀ナル方ニ覚ヘケレドモ、③吹モ定ヌ浦風ニ靡キハツベキ烟ノ末モ、終ニハウキ名ニ立ヌベシト、心強キ気色ヲノミ関守ニナシテ、早年ノ三年ヲ過ニケリ。

基久の娘は、送られてきた手紙にたやすくなびかない。『冥応集』でも、②の後には、「度々文ヲヤリシニ返事ヲダニセズ」と、地頭の娘がなびかないことが記されている。『冥応集』には、『太平記』の表現が場面ともども取り込まれていると考えられる。

地頭の娘が僧の恋心に応える④についても、果たして『太平記』巻第十八「春宮還御事付一宮御息所事」の、尊良親王が今出川公顕の娘に恋文を送る場面に、同じ表現が見える。

其後ヨリ度々御消息有テ、云バカリナキ御文ノ数、④早千束ニモ成ヌ覧ト覚ル程ニ積リケレバ、女モ哀ナル方ニ心引レテ、ノボレバ下ル稲舟ノ、否ニハ非ズト思ヘル気色ニナン顕レタリ。サレ共尚互ニ人目ヲ中ノ関守ニナシテ、月比過サセ給ケルニ、

この後、尊良親王と今出川公顕の娘は契りを交わすとあるので、ここでも表現とともに場面が取り込まれているといえるだろう。

『太平記』の表現は、いずれも男女の恋愛が記された箇所に見えるものである。蓮体は、『太平記』の各場面を十分に理解した上で、これらの表現を『冥応集』に転用し、再構成していると見てよい。

③の記された『太平記』巻第十五、④の記された『太平記』巻第十八の例には、四角囲みで示したように、ともに「千束」や「関守」など、同じ語が使われている。『太平記』からの取り込みに際しては、このような共通点も考慮された可能性がある。蓮体は、『太平記』という作品を、熟知していたと推測される。[18]

では、このような美文を付け加えた意図はどこにあるのだろう。恋愛場面の肥大化は、説話の末尾に記された「婬欲多」きことを強調した結果と見ることもできる。しかしながら、美文に乗って話が進んでいることからすれば、ここは読

ませ所（もし、説法の場で実際に用いていたのならば、聞かせ所）にもなっていると捉えることができる。すなわち、読者（聴衆）を引きつけておくという意図が、この美文調には認められるのではないだろうか。

ひるがえって、『沙石集』における僧と娘とのやりとりがどのようなものかというと、先ほども挙げたように、非常にあっさりとした表現で終わっている。『沙石集』においては、夢でもって現世のはかなさを知る所が説話の眼目であり、若い二人のやりとりをこと細かく記す必然性はなかったといえる。それゆえにシンプルな表現でもよいのだろう。そして、逆に、そのような箇所だからこそ、あれこれと自由に放り込める余地が生じているともいえる。その隙間が、編者（語り手）である蓮体を刺激し、『太平記』の表現を使って、出典の『沙石集』にはない場面を構築させたのではないだろうか。

高滝説話の例は、『沙石集』の説話が、近世の仏教説話集（勧化本）の中でどのように変貌を遂げたのかを具体的に示す、あるいは、説法の場でどのような形で語られていたのかを想像させる興味深いものである。もちろん、美文調を始めとする表現に関しては、作品全体を見渡していく必要がある。[19]『冥応集』以外の蓮体の著作、あるいは他作者の勧化本の存在も、当然視野に入れていかねばならない。

六　おわりに

以上、『冥応集』の一説話の出典を明らかにし、それらとの比較を通し、『冥応集』における出典利用の具体相を浮き彫りにしてみた。

出典との関係だけでなく、『冥応集』をめぐっては、まだまだ考察すべき問題が山積している。小論は、その中にやっと足を踏み入れた程度の試みであるが、今後の研究の進展にいささかなりとも寄与することができれば幸いである。

注

(1)巻一～三（前集）は宝永二年（一七〇五）刊、巻四～六（後集）は同三年刊。『冥応集』・蓮体に関する先行研究は、注の後に一覧の形で挙げた。なお、本稿での『冥応集』の引用は、『宝永版本 観音冥応集 本文と説話目録』（後掲［先行研究一覧］参照）に拠る。引用に際し、振り仮名は適宜省略した。

(2)岩波日本古典文学大系に拠る。俊海本が「或僧解夢覚会一息妄念事」である以外は、諸本ほぼ同じ。

(3)安田孝子氏「後世における『沙石集』受容」（『説話文学の研究 撰集抄・唐物語・沙石集』所収　平成9　和泉書院）、廣田哲通氏「『沙石集』の受容と『直談因縁集』」（『中世仏教文学の研究』所収　平成12　和泉書院）。

(4)広本系は古本系、略本系は流布本系とも称される。『沙石集』諸本については、渡辺綱也氏『沙石集』「解説」（岩波日本古典文

学大系　昭和41）・小島孝之氏『沙石集』「解説」（小学館新編日本古典文学全集　平成13）・土屋有里子氏『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』（平成15　笠間書院）などを参照した。刊本については、小林忠雄氏「沙石集の版本に就いて―特に整版本・活版本を中心に―」（『国学院雑誌』60-6　昭和34・6）、稲垣泰一氏「〈資料紹介〉架蔵貞享二年版『沙石集』について」（『説話』10　平成12・2）などの先行研究がある。

(5)説話題目は、梵舜本・内閣文庫本・略本系諸本が、ほぼ同じ。

(6)貞享三年刊本には、次のような例がある。『冥応集』巻第三8話で「高滝へ尋往タリケレバ」とある部分は、ほとんどの『沙石集』諸本が『冥応集』と同じである。ところが、貞享三年刊本だけは「高瀧へ尋ユキテケレバ」とする。もっとも、この例だけで、蓮体が見た可能性のある『沙石集』から、貞享三年刊本を排除するのは危険であろう。他の説話に関しても、さらなる調査が必要である。

(7)澄観の『大方広仏華厳経随疏演義鈔』巻第二十二（大正蔵三六165下）によれば、漢の武帝と善元夢の故事。『三国志』巻第二十九（魏書・方技伝）によれば、魏の文帝と周宣の故事（『芸文類聚』巻第九十二・鳥部下・鴛鴦にも）。

(8)窺基（慈恩大師）の『成唯識論述記』巻第一本（大正蔵四三243下）に見える。

(9)④⑤は、略本系に記されている。広本系（十帖本）の内閣文庫本にも見えるが、「裏書云」として巻末に記されている（岩波日本古典文学大系『沙石集』頭注に指摘あり）。

(10)『日光天海蔵　直談因縁集　翻刻と索引』（平成10　和泉書院）の「類話一覧」参照。

(11)『類聚既験抄』の類話は、内容も他のものとはやや異なるようである。この点については、小学館新編日本古典文学全集『沙石集』頭注に指摘あり。

(12)阿部泰郎氏「『直談因縁集』解題」（『日光天海蔵　直談因縁集　翻刻と索引』所収　注10参照）、山崎淳「『金玉要集』と類話」（『日本古典文学史の課題と方法』所収　平成16　和泉書院）参照。なお、『金玉要集』は、梵舜本に近似する本文を有している。この点については、前掲山崎論考、近本謙介氏「唱導の文の集成―内閣文庫蔵『金玉要集』について」（『伝承文学研究』53　平成16・3）参照。

(13)近本謙介氏「直談の説話の位相―日光輪王寺天海蔵『直談因縁集』をめぐって―」（『山辺道』41　平成9・3）、注12阿部氏解題参照。

(14)『直談因縁集』が示している「夢」は、『法華経』巻第五・安楽行品第十四の末尾に出てくるものである。

(15)注12阿部氏解題では、高滝説話を「むしろその（山崎注・『沙石集』の説話評論における①の荘周の故事の）本朝版として翻案された創作説話というべきもの」と推測する。

(16)以下、『太平記』の本文は、岩波日本古典文学大系（底本は慶長八年［一六〇三］古活字本）に拠る（振り仮名は省略）。寛文十一年（一六七一）刊の整版本（『新刻太平記』）なども同一の本文である。なお、小学館新編日本古典文学全集『太平記』（底本は水府明徳会彰考館蔵天正本）と比較してみると、やはり古活字本・整版本の方が、『冥応集』に近い。

(17)『太平記』で「忘レ草ノヲフ（生ふ）」とある部分が、『冥応集』では「忘レ草ノ逢」となっている。このような出典との相違

については、今後検討していきたい。

(18)『太平記』の名は、『冥応集』の「援引書目」に見える。谷垣伊太雄氏「『太平記』から『後太平記』・『観音冥応集』」（後掲［先行研究一覧］参照）では、『冥応集』巻一12話「楠正成観音ノ御利益ヲ蒙ル事」における『太平記』利用についての考察がある。

(19)高滝説話に限らず、『冥応集』には、和歌的な表現を用いた美文調が目立つ。こうした表現は、『冥応集』の特徴の一つであるといってよい。すべての美文について出典が明らかになっているわけではないが、次のような例もある。第三節で触れた『冥応集』巻第三16話「義朝ノ妻常盤観音ヲ念シテ母子共ニ安穏ナル事」の中にある、「嵐ニ氷ル道芝ノ…」を含む表現は、出典である『平治物語』巻下「頼朝生捕らるる事付けたり常葉落ちらるる事」にも見える。また、『冥応集』巻第四10話「住吉石地蔵ノ因縁、並ニ嶋津殿先祖ノ事」では、「草葉ニ置ル露ノ身ノ…」で始まる表現が、やはり出典である『後太平記』（延宝五年［一六七七］刊）巻第八「和田和泉守住吉石仏射事附丹後局之事」に見える（二例目は神戸説話研究会・二〇〇六年五月十三日・小林直樹氏発表資料に拠る）。この二例は、出典の説話に美文がすでに含まれているケースである。

［先行研究一覧］（(1)〜(3)の分類は便宜的なものである）

(1)『観音冥応集』

叢書江戸文庫『仏教説話集成［一］』（平成2　国書刊行会）

西田耕三氏解題

堤邦彦氏「勧化本概説」（『近世仏教説話の研究』平成8　翰林書房）

西田耕三氏「近世説話集10の解説」（『国文学』49-5［近世の仏教説話］平成16・4）

新間水緒氏「古本説話集下巻　本文と注釈—第五十三話—」（『花園大学国文学論究』32　平成16・12）

中前正志氏「揺らぐ檀那—丹波国穴太寺縁起小考—」（京都女子大学「女子大国文」136　平成16・12）

谷垣伊太雄氏「『太平記』から『後太平記』・『観音冥応集』」（『樟蔭国文学』42　平成17・1）

小林直樹氏「霊験譚の都市的変容—蓮体『観音冥応集』の役行者説話をめぐって—」（都市問題研究「大阪市とハンブルク市をめぐる都市・市民・文化・大学」報告書　第3分冊　都市文芸の東西比較　平成17・3）

奥智鶴氏「『験記』目録と同話・類話」（神戸大学「国文論叢（特集　長谷寺研究）」36　平成18・7）

神戸説話研究会編『宝永版本　観音冥応集　本文と説話目録』（平成18　和泉書院）→「解説」では、中原香苗氏が「蓮体の生涯と著作」、山崎淳が「『冥応集』の性格」を担当。

(2)蓮体

行武善胤氏『霊雲叢書解題』（大正5　丙午出版社）

内海幽水氏「近松雑話（一）」（「週刊朝日」2-16　大正11・10・8）

宇田川文海氏「近松翁と密教の高僧(一)〜(四)」（「週刊朝日」3-2〜5　大正12・1・1〜21）→「早稲田文学」250（大正15・11）、鈴木行三氏編著『戯曲小説近世作家大観』（昭

和8　中文館書店）に再録。
上田進城氏「蓮体和尚（上）～（下）」（「密宗学報」143～145　大正14・6～8）
上田覚城氏「蓮体和尚行状記」（『昭遍和尚全集』第六輯　昭和7　同全集刊行会）
土橋真吉氏『河内先哲伝』（昭和17　全国書房）
上田霊城氏「近世真言宗の庶民教化―来世信仰―」（「密教文化」99　昭和47）
信多純一氏「阿闍梨契沖伝漫考」（『近世大阪藝文叢談』　昭和48　中尾松泉堂・赤尾照文堂）
上田霊城氏『浄厳和尚伝記史料集』（昭和54　名著出版）
『日本古典文学大辞典』第六巻・「蓮体」の項（信多純一氏執筆　昭和60　岩波書店）
石田晋一氏「蓮体和尚年譜稿」（「みをつくし」4　昭和61・7）
信多純一氏「逸せられた近松の逸話」（「演劇研究会会報」24　平成10・7）
『河内長野市史』第二巻　本文編　近世（平成10　河内長野市）
上田霊城氏『浄厳大和尚行状記』（平成11　霊雲寺・延命寺）
羽生紀子氏「大坂出版界の具体相―西鶴の周辺―」（『西鶴と出版メディアの研究』第二章　平成12　和泉書院）
小林直樹氏「塚田報告へのコメント」（「都市文化研究」1　平成15・3）→同コメントはweb上（http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/data/pdf_zasshi 01/13-19 comment.pdf）に公開。
中山一麿氏「三宝院流偽経生成の一端―随心院蔵『即身成仏経』とその周辺―附・随心院蔵『録外秘密経軌目録』」（二〇〇四年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』　平成17・3）
平成18年度資料館秋季特別展『元禄の高僧　浄厳と蓮体―河内から江戸へ―』（平成18・10　河内長野市立郷土資料館）

(3)

『観音冥応集』以外の蓮体の著作（含翻刻）
『譬喩因縁』通俗礦石集』（『説教学全書』第四編　明治期　法蔵館）
→国立国会図書館・近代デジタルライブラリーにてweb上での閲覧が可能。
『真言開庫集』（『真言宗安心全書』上　大正2　六大新報社、『国文東方仏教叢書』二輯三巻講説部　大正5　東方書院）
→国立国会図書館・近代デジタルライブラリーにて明治10年刊本のweb上での閲覧が可能。
『光明真言金壺集』（『真言宗安心全書』下　大正3）
『秘密安心往生要集』（『真言宗安心全書』下　大正3、『近世仏教集説』　大正5　国書刊行会）
『宝篋印陀羅尼経和解秘略釈』（『近世仏教集説』　大正5）
三好龍肝氏『真言密教霊雲寺派関係文献解題』（昭和51　国書刊行会）
塚田晃信氏「蓮体の礦石集―近世唱導説話の一光芒―」（東洋大学「文学論藻」52　昭和52・12）
『地蔵寺雑録』（『河内長野市史』第七巻　史料編四　昭和55）
外村展子氏「『礦石集』について」（「説話」7　昭和58・8）

石田晋一氏「蓮体和尚著『礦石集』翻刻並略注(1)」(「みをつくし」5　昭和62・10)
後小路薫氏「教化の旅と説話—蓮盛と蓮体の行脚—」(「解釈と鑑賞」55-3　平成2・3)
石田晋一氏「『礦石集』翻刻並略注(2)」(「みをつくし」6　平成2・12)
西島孜哉氏「出版禁令と書肆・作者—『礦石集』を題材として—」(「鳴尾説林」4　平成8・9)
堤邦彦氏「富と近世説話「奸商の悪報—両枡説話の近世的展開」」(「説話文学研究」36　平成13・6)

[付記] 本稿は、仏教文学会本部例会(平成十八年十二月九日)での口頭発表の一部を論文化したものである。資料閲覧などにあたり御高配を賜った諸機関に心よりお礼申し上げます。なお、『沙石集』の写本類は、写真版で確認したものが多い。その閲覧に関しては、荒木浩氏に御高配を賜った。ここに深く感謝申し上げます。

(やまざき・じゅん　本学大学院特任研究員)